

又按。謝氏所謂所以爲祖考之氣。卽是以天地公共之理。言有是理。便有是氣。故有公共之理。必有公共之氣。人死其氣亡。但之所以爲其人之理。未嘗亡。故有感則應。是鬼神感格。由理而生也。

一、室鳩巢祝青地浚新華甲詩

余生自二月二十一日也
今歲青地浚新君甲子一周。行年六十。某月某日。卽其初度之辰也。子姪爲君爲壽。君謙讓不聽。而子姪之情不可奪。夫生日張樂設宴。君子以爲唯具慶者可也。然唐宋以下行之以爲故事。而本朝人家習之。近世殊甚。其於禮爲可歎。爲不可歎。余謂。此事自爲。則不可也。子弟爲父兄爲之則可也。孔聖不曰乎。父母之年不可不知。一喜一懼。然則父母之壽在孝子之情。其可喜莫大於此。其爲親祝初度介眉壽。宜爲君子之所與也。況浚新君。上有王母。而爲子姪請之。其可距乎。君走書告其事於余。余聞而嘉之。於是賦小詩一篇。以爲千里之贈。

子姪俱賢世所稀。令聞廣譽共春輝。壽星暗與德星聚。青鳥還兼黃鳥飛。緗帙亂抽方朔史。綺筵雙舞老萊衣。大邦山水多佳境。幾處仙遊採藥歸。

七十七老翁鳩巢室直清。拜書于駿臺之草堂。
右三月九日筆。自東都。

一、朝聞道の儀室鳩巢來狀

寛三月先生來書の内

松平土佐守殿家來眞邊金左衛と申者、老夫に逢申度旨にて、拙者存知の方より書状もらひ候て罷越、始て逢申候。只今の土佐守殿殊に正學の志深く候由、委細承り珍重存候。當年四月中には參勤の筈にて候。彌様子可承と存候。土佐は山崎嘉右衛門など學術の本にて學風よろしく御座候。比曰彼眞邊氏、朝聞道夕死可矣の章を疑問に及候。其にも付此度聞字をよく合點いたし候。金左衛門問。目にも耳に聞にては無之由申越候。もとより其通に候得共、聞くと申候へば耳を離れ不申辭にて候。是を此度合點いたし候は、人生れながら知るものにて無之候へば、必ず聖賢の言歎、又は師友の論などにて承候。是聞道のはじめ、道者耳より入るものにて候。それを種にして工夫修行いたし、此道心に熟し候て、とんと合點したる時、彼耳にてきよたる所を、今こそ聞とつたといふ物にて御座候。此時聞道と始て許さるゝにて候。如此見候へば聞字よくすみ申と存候。

いかゞ被存候や、委細は筆紙に難申盡候。以上。

一、蟲喰齒含藥方

蜂巢三匁。あさしらぎ五匁。柚の葉五匁。

右三色合て、うがい茶碗に水一盃半入、一盃に煎じ含候。

吞込不申吐捨候。牧野養潛先生傳。試候へば虫申出候。

又方。上氣或は膿血にてゆるぎ病、齒ぐきうき、或はかゆく、或はうづき中等に能候。胡桃十匁。くちなし五匁。此兩目之割を以て、何程にても同事、畢竟くちなしは

胡桃の半減也。

右二味、分々に黒焼にし燒濟候上にて、右兩目懸合細末にし二味打合、鹽を少し加へ齒にぬり、暫有候てうがい仕候。

齒痛候時分は、晝夜に五六度も付宜候。平生も付候て能候。其時は朝夕と寝ざまと、以上三度程に付宜候。何程性惡敷ゆるぎやすき齒にても、平生用れば老年にも不痛候。寝ざ

まなどには付候まゝにて臥り候て、假令喉へ入候ても不苦候。若鹽を入れてはむねにむかひ申事も候はゞ、鹽除候てもよし。是は齒根を尙更堅めんとの爲計なればなくとも不

苦。且又右二味分々にやき申仔細は、各生の時と燒申上とに兩目違申故、燒上申時の兩目を用る事也。

右笠松長左衛門傳。長左衛門五十八歳の時迄、年來用來試申候。元來齒性惡敷候得共、五十八歳迄無恙、殊に堅き食物も今以給申候由申聞候。

一、室鳩巢甲寅春作詩

詠庭前紅梅

余庭有紅梅一株。高僅三尺餘。枝幹橫出。於地上。春來著花爛漫。戲呼爲鳳凰樹。

草堂梅發一庭香。白日深紅明半牆。酒上臙脂仙子醉。玉裝毛羽鳳凰翔。石家斧下珊瑚碎。織女機中錦繡揚。傳語春風能愛護。知吾老去惜年芳。

題八幡宮紫藤花

陰々綠樹繞叢祠。滿架紫藤映碧池。偏覺水鄉風景好。清和天氣自相宜。

○

丹青耀彩。擲甲在躬。偉哉何人。曰諸葛公。當時出師。威振華夷。暨魏屈吳。死猶走懿。大名赫々。遺像有儼。使人竦然。

書于駿臺之草堂。七十七翁室直清

我思古人。維蜀武侯。出處以正。伊呂之儔。受遺託孤。恢復是謀。至誠奉國。有功彌恭。胡天不祚。身沒軍中。百世之下。